

障がいと共に生きるアーティスト達と
そこにある世界を発信するフリーペーパー

Hugs

はぐす について

「Hug」という言葉には、“愛情をもって抱きしめる” “こだわりを守り続ける” “自分自身を幸運だと思う”などの意味があります。フリーペーパーHugsは、障がいと共に生きながら創作や表現活動をしている方々や施設取材し、その活動の様子や日々の思い、そこから広がる豊かな世界を伝えていくことを目的にしています。

創刊から福祉施設を紹介してきましたが、今年度から個人やプロジェクト等にも焦点を当てた内容にしていきたいと思います。またnoteでの発信を中心にし、フリーペーパーはダイジェスト版として発行してまいります。



まみちゃん

https://note.com/freepaper_hugs/
こちらのQRコードからもアクセス可能です。



はぐちゃん



創作活動ワンポイント講座

昔の作品を見返したときに
いつ作ったのか
わかんなくなっちゃうの

あ〜あるある
そういうときはね

作品のウラにメモを残しておくといいよ!

「うらだよ」

＜作品名＞ 作者名
制作年 / 使用画材

スマホとかで作品の記録写真を
撮っておくのもオススメだよ

データ化しておくんだね!

記録写真のNG例!

影がのっている! 角度が
ついている!

暗い! 耳が潰れる
足が隠れる!

はぐちゃん作品リスト

画像	作品名	制作年
	おはな	2025 7.1
	うさぎ	2026 1.1
		...

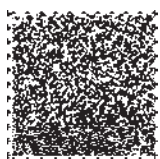
表計算アプリとかに
まとめておくと
いつでも見返せるし
他の人とも
共有しやすいよ

なるほど!
これならわかりやすいね!

編集後記

きっちりと定規で線を引いた枠の中に、ひたすらバスを描く。「バスを描く」というシンプルな行為の中にも、人の個性は出る。細かいことが得意なのか、好きなのか、梅田さんの作品の細かさは幼い頃から見てきた母のパッチワークがどこかで影響しているかもしれない。バスは小学生の頃からずっと好きなもの。そういう内包的なものが組み合わせたり、表現として出てくる。障がいを持つ人の中には、言葉で語れない人もいるが、作風からは何かしら「その人」が出ている。作品に触れ、その人に触れる。アートを通して、人のつながりは広がっていく。

藤田和俊



これは「Uni-Voice」という
音声コードです

Hugs 2025年冬号 vol.13 / 2025年12月1日発行

発行 / あいサポート・アートセンター
〒682-0018 鳥取県倉吉市福庭町1丁目105番地2
TEL/FAX: 0858-33-5151
E-MAIL: tottori.asac@gmail.com
HP: <https://aisapo.art/>

取材・編集・撮影 / 合同会社 僕ら
藤田和俊
デザイン / 森下真后
協力 / 鳥取県

障がいと共に生きるアーティスト達とそこにある世界を発信するフリーペーパー

Hugs

はぐす

2025年冬号 vol.13

特集

梅田佳輝 うめだ よしてる
(鹿野第二かちみ園)

自分を表現し、 世界を広げる。



これは「Uni-Voice」という
音声コードです

自分を表現し、 世界を広げる。

梅田佳輝（鹿野第二かちみ園）

鳥取市鹿野町にある鹿野第二かちみ園で創作活動に取り組んでいる。鳥取県障がい者芸術・文化作品展「あいサポート・アートとっとり展」では2017年に「うねり」という書の作品で最優秀賞を受賞した他、受賞作品多数。大好きなバスを描き連ねたり、繰り返し色を敷き詰めて花や模様を描いたりする作品など、緻密さとダイナミックさを兼ね備えた、多彩な才能を発揮しているアーティスト。



広いホールの中央に大きな紙を広げ、その上に寝そべて描く——いつもの光景だ。手元を覗くと、定規で引かれた細かな線の中に一台一台描かれるバス。その姿には根気強さと集中力、梅田さんらしさが滲む。

「机に乗らないほど大きな板に描いたのがきっかけで、以来寝て描くようになりました。色や描き方にもこだわりがあります。小さな色が積み重なり完成したときの美しさには、私たちも毎回感動します」

そう語るのは、鹿野第二かちみ園の職員の太田久美さん。同園では、15年ほど前から利用者さんのアート活動を開始し、梅田さんも絵や文字で表現し始めるとその才能は瞬く間に花開いた。鳥取県内の障がい者アートで数々の賞を受賞するなど、独自の世界観を持つ作品で、多くの人々を魅了している。

鹿野第二かちみ園で創作活動始める

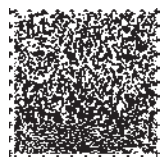
同園のアート活動の時間は、もともと農業をして体を動かす時間だったが、利用者さんの高齢化や体力面を考え、室内工作を本格的な創作活動へと発展させた。今では週3回、午後の1時間半ほどを創作活動の時間に充て、それぞれが思い思いの作品づくりに取り組んでいる。梅田さんも最初からバスを描いたわけではない。

「最初の頃は何かを描くというより色塗りをしていた印象です。バスを描くのは暇つぶしで余暇時間に描いたりしていて、アート作品につながるという意識は私たちにもなかったのですが、だんだんと梅田さんの“好き”がアート作品として形になっていきました」

鉛筆で細長い紙一枚にバス一台を描いていたものを組み合わせた作品『日交バス』が鳥取県障がい者アート芸術文化祭で最優秀賞を受賞。バスの描き方や構成はどんどん変わっていき、現在の大きなキャンバスに何台ものバスを描くスタイルへと進化した。

母・孝子さんによると、梅田さんの“バス好き”は小学2年生の頃、大阪から鳥取市へ引っ越してきたのが始まりだという。通学で乗った青いバスではなく、赤い日交バス（株式会社日本交通のバス）に心を奪われ、「広告の裏にまでバスの絵を描いていましたね。そこからもうずっと、バス一筋（笑）」。

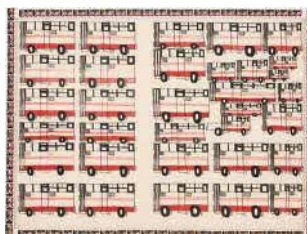
鹿野第二かちみ園で過ごす今も、部屋にはバスの模型が並び、アルバムにはバスの写真がびっしり。行き先表示や広告まで細かく描き込むのは、日々の観察の賜物だ。



これは「Uni-Voice」という
音声コードです



▲梅田佳輝〈日交バス〉



▲梅田佳輝〈バスターミナル〉



▲梅田さんの部屋に置かれるバスの模型

多彩に変化し続ける作風

梅田さんの創造の世界は、バスの絵だけにとどまらない。書道の先生を招いた創作活動も行っており、梅田さんは筆ではなくモップを使った大胆な作品「うねり」（2017年）を発表。モップが描く流れるような線は力強く、見る人を惹きつけ、あいサポート・アートとっとり展の美術部門で最優秀賞に輝いた。さらに、職員の提案で気泡緩衝材を使った「ドット混（コム）」（2017年）や「色の踏み場もない」（2018年）、5mmごとの枠で幾何学模様を描いた「5mmの世界」（2021年）など、多彩に変化してきた。

「どんどん生活の中でも“こだわり”が増えてきていて、そういう細かな性格が作品にも表れているんだと思います」（太田さん）

細部へのこだわりや繊細な手作業の積み重ねは、梅田さん自身の生まれ持った特性、そして、母・孝子さんの影響もあるのかもしれない。

「小さい時から手先は器用な方で、私が趣味で始めたパッチワークも見ていたのかもしれませんが。最近の作品を見ていても、色合いがきれいだなあと感心するんです」

アートを通じて広がる世界

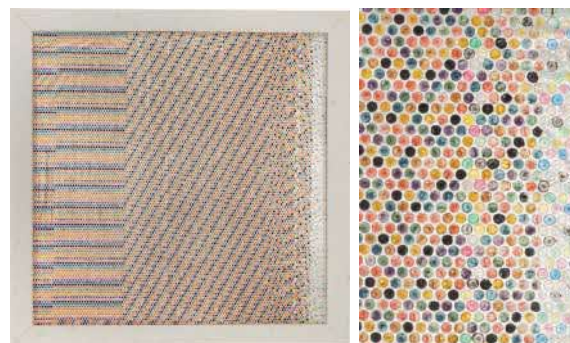
今年は、鳥取市中心市街地商店街で開催されている「フクシ×アートWEEKs 2025」（10月25日～11月24日まで）のピックアップアーティストにも抜擢され、「over and over」と題した作品展を開くことになった。施設内展示や小規模個展が中心だった活動も、障がい者アートが社会に広く紹介されるようになり、活動の輪は広がっている。

「以前は施設の内側だけでしたが、アートを通じて世界が開けました。作品を見た方が県外から連絡をくださることもあり、“すごいことになってきたなあ”と実感します」と太田さん。母・孝子さんも「アートに出会わなければ今でもバスだけを描いていたと思います。いろんなご縁のおかげですし、本当にありがたいです」と微笑む。

表現は、その人自身を映し出す行為だ。積み重ねてきた日々の経験、好きなものへの思い、支える人々の愛情。梅田さんは、唯一無二の作品を通して世界とつながり、今日も誰かの心を動かしている。



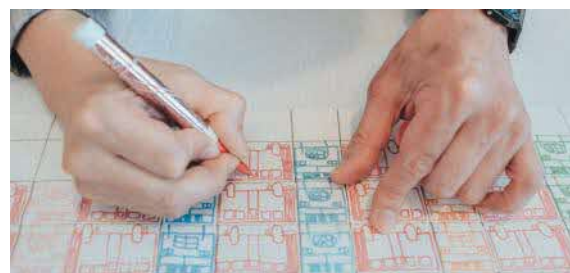
▲梅田佳輝〈うねり〉



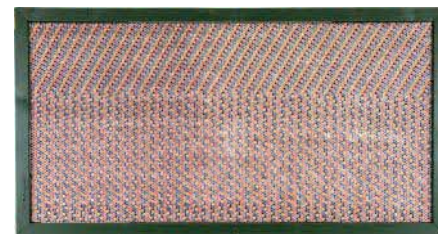
▲左：梅田佳輝〈ドット混（コム）〉／右：〈ドット混（コム）〉部分拡大



▲左：太田久美さん／右：梅田孝子さん



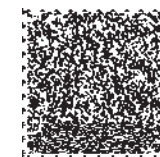
▲バスを描く梅田佳輝さんの手元



▲梅田佳輝〈色の踏み場もない〉



▲左：梅田佳輝〈5mmの世界〉／右：〈5mmの世界〉部分拡大



これは「Uni-Voice」という
音声コードです